

# 京都産業大学 ことばの科学研究センター 第1回研究会

日時：2026年6月24日（水）14:00～16:00

会場：4号館2階総合学術研究所会議室

## 構文と事態の把握

**島 憲男**（ことばの科学研究センター研究員・外国語学部教授）

これまで検討してきた宮澤賢治作品や Michael ENDE の *Momo* からの用例に基づいて外界の事態がどのように把握され、ドイツ語ではどのように表現されているかを紹介する。特に日本語の擬音・擬態表現に相当する**オノマトペ**が生起する**オノマトペ構文**、文中に主に同語源である**対格名詞**を有する同族目的語表現、名詞句の結果状態を描写する**結果項**を持つ結果構文に注目した場合、その特徴的文肢が文脈中で想定される外界を認識する主体（＝知覚者）の把握内容を言語化した主観的な表現であることを示したい。

## ことばの中に心が広がる

—イタリアの詩人ダンヌンツィオのアルカイズム—

**内田 健一**（ことばの科学研究センター研究員・外国語学部准教授）

ガブリエーレ・ダンヌンツィオ（1863-1938）の代表的詩集『アルキオネー』（1903）に含まれる「仕事と日」と「豎琴のない吟遊詩人」は、古代ギリシアのヘーシオドス『仕事と日』が念頭に置かれ、そこに登場する白髪の老農夫は古代ローマのウェルギリウス『農耕詩』を想起させる。農夫のことばは壮大な古代叙事詩の一節のようで、耳を傾ける人の心はその中に広がる。研究会では、ダンヌンツィオの擬古的な詩作技法を分析し、ことばによって過去を今に蘇らせることの意義を検討する。